

## 米株上昇を受けて反発—材料株物色中心—

2009年8月13日(木)

第一生命経済研究所 経済調査部  
副主任エコノミスト 人見 小奈恵

TEL 03-5221-4523

e-mail: hitomis@dlri.dai-ichi-life.co.jp

### 米FOMCには反応薄

FOMCは、政策金利の据え置きや米国債買い入れ期限の延長(9月末→10月末まで)を決めたほか、景気の現状判断を「縮小ペースが緩やかになっている」から「経済活動は下げ止まりつつある」へと上方修正しました。これを受けて、マーケットでは米国債が売られて株価も連れ安、金利や米ドルは反発しました。しかし、こうした動きは一時的で、いずれもすぐに発表前の水準近くまで戻りました。ほぼ想定範囲内で、FOMC後の市場の反応は限定的でした。ただし、FRBの現状の景気に対する見方が想定以上に楽観的な方向へと変化してきたことは、株式市場に安心感を与えました。

米株市場はハイテクや住宅、小売りなどの好決算を好感して寄りから堅調で、FOMC後も騰勢を維持し、NYダウは3日ぶりに反発しました。一方、米国債券市場では、FOMCで低金利政策がしばらく維持される可能性が高まったことから、政策金利の影響を受けやすい2年債利回りは低下したものの、10年債入札がやや不調だったことから10年債利回りは上昇しました。

国債の買い取りペースを緩めて10月末に終了するとの期限を示したことで、金融緩和策は徐々に縮小されていくものと思われます。そして、今後は金融政策の出口戦略に焦点が移ってきます。

### 個別材料に振らされる株式相場

米株市場の大幅反発を受けて日経平均株価は10500円を超える水準で寄り付いたあとは、しばらくほとんど動きがありませんでした。上値の重さを感じられる中、前引け前に、1ドル=96円台前半で推移していたドル円相場が95円台へ入り、売買代金上位で堅調に推移していた環境関連銘柄も売り優勢となり、株価指数は急速に上げ幅を縮めました。しかし、後場に入り、日経平均株価は一段と上げ幅を拡大しました。上昇を勢いづけたのは繊維株でした。繊維大手が、糖尿病治療用に使う薬剤を注射以外の方法で投与する技術を開発したと報じられたことが好感されて大幅高となりました。中国株が前日比マイナスからプラス圏へと切り返し、円高基調だった円相場が円安方向へ転じたことも、株式相場にとってプラスとなりました。また、ベトナムの鉄道建設事業に日本の新幹線方式が導入される方針と報じられたことが好感されて鉄道関連株が物色されたほか、地震による高速道路の復旧作業遅れを受けて、空運株も大幅高となりました。ただし、前場に見られた環境関連株の物色の動きは後場には見られず、短期的な売買中心の動きでした。

総じて見ると、薄商いの中、材料の出た銘柄の値動きに振らされる展開で、結局日経平均株価は前日比で上昇したものの、日経平均株価の始値と終値の差は10円足らずと、方向感の乏しさが感じられる相場でした。

日経平均株価は7月に付けた安値から先週末まで15%程度上昇しましたが、その間に日本株を買い越していたのは外国人投資家でした。買い越し金額は約1兆2000億円にのぼります。このように、日本株の上昇には外国人投資家の動向が鍵を握ります。FOMCを無事に通過し、米景気底入れが現実味を帯びてくる中で、今後の焦点は雇用と消費に移ってくるものと思われます。米国の実体経済に力強さが確認できるまでは、外国人投資家の日本株式市場への継続的な資金流入を期待するのは難しいように思います。

以上